里見八犬傳

第七輯　巻之七

へ13
709
38

遠門 13
號 707
卷 38

明治二六年十月九日購求

南總里見八犬傳第七輯巻之七

東都　曲亭主人編次

第七十三回

仇を謬く奈四郎頭顱を喪
客を留く次團太闘牛を誘る

却説四守城を還るく克元ある宣ふやうゝ指月院を発ちて住持の凡僧ゝ安を知らう國中の士民渇仰して活菩薩と稱まるゝ虚名あいあらゞ況彼二天士の面魂實ふ一人當千の勇士ゝ渠ゝ意を固くして勤仕を推辞むとも間ゝく時なく物を贈ゝて日ふ月ふ恩を積まば竟ふ心を傾けて當家ふ隨後ゝまとわらん就て木工作が後家夏引ゝ良人を害せふあらんかゞも密夫奈四郎が木工作を殺せーよと宜るゝら隱して悪事を資けゝるゝれば良人を害せふあらゞ當ふ嚴科ふ行ふべー又奈四郎が後僕嘱内も月比主の悪を資

けく盜竊殘忍せざるとなし。これ亦頭を刎ぬるの罪只彼木工作が小厮出来
次八奈四郎夏引ホゲ悪事を知らざる曾く夏引ホ謀られく信乃を誣んとする
のみかまびその罪ホ軽重あり。夏引ホと同ト如く浪ハ一百鞭ち。國境より追
放てよとの餘のるハ如此々々と言掟ぬ。ハ元元これを奉せく形のごとホ行ひ。
はまこび夏引懸内ホハ身首処を異なせ戸を市に梟れく餓る狗ハ肥まる隱
慝の報ひ怕るべし。程ホ猿石る村の故老の百姓ホハ去元の下知を受て木工
作が亡骸を村人ホ舁て指月院ホ送り来ければ、大法師受とりその霄火
葬ホ為ける登時信乃道節照文ホハ木工作が死後（名迹を件の百姓ども
商量く親族の子を索るる猿石の鄰村ホ四六城氏の百姓あり則木工作が養
父より五世前ホ分れる血脈相續の氏族なれども今ハ迭ホ疎遠なる。この四六城
氏ホ二箇の男子あり。次男ハ尤才あるそ文筆を好むものなれ考ふべしとなる二犬士
照文ホ教びく濱路姫ホ云云とかれらのようを告まうしつ。木工作が白骨を半分
ちそその一壺を四六城の香華院へ葬らしめ即便鄰村ま四六城氏の二男をそ。
木工作が名迹ぐるべしと約束まこれホより故老の百姓ども件の二男を
呼び迎へ名を木工作と更め養父の家を嗣けりめくて前の木工作ま仕ふる奴婢
杜人ホも又後の木工作ま從ふその家ま嗣ぐ。
霄、大照文ホ相譚ぬる。姫ハの情願ホ縛十二分ホ成就しれどこの地の逗留ホ
ふ所べからず。何とかれば國主信昌ハ姫を愛ぬる良ハ俺ども留ん為ホ惑ふ遍
里ホ尋ぬる恩意ホ西鄰とるるく立ちうるる難ぬべしその惑を受ざる先ホ他郷へ避ん
ほうるるる。蛍嬬生もこの議ホ就く姫ハの安房へ入ぬ猶豫せ
必後悔ホ及ぶ。大照文ホ異議ホ及ぶ領ぬ二犬士の意見愚意慨
へりまらず今より起行の准備をせんと応果くるや立んとせ。照文を道節急ホ

推参仕るべく且候へ。俺們も翌未明に共伴を立去る。相摸武蔵は盗
処まで姫うへを送りまゐらせべしとて、暇兵七名を二人に送り置く四人を姫うへに
隷属へ俺們の地を去ること遠く荘助ばうら遠る彼七人國の中にあれん然ども荘助
まうぞ。その処へ参る歟或い火急の要言あると暇兵三名を走りて言遣よ
遣べし。この隙に俺們が商量せる所べとなり照文まうを乞ふ彼暇兵七名に大
士の非常に備へ奥に五君の隷を留べ四人五人を留るとの意ヨヌーとまぐるべ。
左ゆも右ゆも各々の便宜に任せ某たらく先路を出よ相摸路に赴く。
鎌倉より舟行にて安房へ届べし然りけれども海上に風濤の難を測ら
ずして道徳は何と思ふと問て傍をうかがへば、大の頭をうち掉て路に今貧るよりて
禍あり只の武蔵より下總をうち過ぎて上總に到るを順路とすべし遠近を争ふ
時ふるべ。この意ばかりぞ又信乃も諫め姫うへ俱に遠くとも陸を出べとの照文則その説に任せ濱路姫に云云と綽の趣を告
まうしぬ。その夜主従起行の准備をなく暁方に濱路姫の乗り物を乗物
暇兵は早七照文に信乃道節と共伴に、大法師は別を告て東を投く
立出れば、大法師に沙弥念成と二箇の暇兵と我六本を後に門前まで送
る。現留別の悲しさ賢と不肖の差別なれば屋内に送るものの惆
然たるぞ中に濱路姫に歌一さと良しぬ袖にまぎ乾ぬ旅衣ぬれぬ水鳥の
羽音も寒き霜月の九日あまりの朝霧沈む月影浮む身も西と東へ別れ路を
惜せるべ。この意より絶に三日を経て信昌の使者甘利兵衛亮元指月院
来く、大法師に主命を述ぶ前日對面の敬ぶとして住持に白銀十枚大
山道節大塚信乃に衣裳各一襲を贈るとの物みな廣益にうち乗
たるに目録を相添て遍与えとそけるを、大に國守の恩を謝して敢その現物を

受ぜ扶ふ。信乃道節に三日已前に濱路を故郷へ送らんと。彼地へ赴
かんとなり。豫てゆゑあり。如く渠に異姓の兄弟を索め巡るもの。これ
なり。なんぞ又拙者に貴賤と。一銭より外な
ぞ。われ。この貺物いとゆゑなし。
施を受げる。貴人の知る所。且拙者に抖擻行脚を旨とて一寺に住持たる
ことを願ふ。當院に杖を駐めしに。先住の憑に依るに。真の住職ゆゑ
那の布施を退けて。我隨をまうける。罪なきに所行。これ。只出家の寡慾
なるに素よりその所志の義をのぶ。なぜ。と謂に色を答まう
し。屋蔭。雇れども受げりけれ。吉元いせん郷をくて三種の贈物をのこ。帰まる國守に
かくとまうもゆぞ。信昌頻りに太息を吻く。彼和尚が一銭なくて施物を受ぞとは
なるつれも。粗彼なる。悔らく由。斷て信乃道節を走せて。憾の顔を招れる
げ。曾君に仕へる兵を煽の謀を旋らて。鄰國を伐るに難しとぞ。

信乃道節が如を汲く。家臣とせんに寔に難し。惜むべきを。繰返ぜ。
今ぞ。嘆息の外なし。信乃道節が豫ての遠慮の符合せを。大
法師は後々まで。生を稱賛せとぞ。案了前齣復説泡雪奈四郎は鄭に躑
躅。崎を逐電せ。時宿所を送り置て。道なる三十金を取らせ。篠子に顛末
をこと。廚内を還せ。後のを俟に暇も。後に夜を日に續て走る程に。大路三十
里。廿五六里を只二日にて過ぐ。次の日の黄昏に八王寺の驛に来ける。この地
方は武藏國。都筑郡なりければ。武田家の封邑に鄰ることなれども。他采地なれば
いかく追捕の兵を被らず。廚内が追著くを俟ずと。ひとり。媼内はあらぬ
しと。客店に宿りを。討め擔に目標を。中に措く。逗留く渠を俟ども。廚内に音な
ぞ。既にくいぐらに。四五日を歴ぬれば。原来彼奴に。做損じて。搦捕られる
ゆゑ。あらん。實ならん。財に西鶴はれく日を過せ。悔けれ。投く。往方を定めん

とく媼内と商量をるに媼内頷く頭を傾け近属両管領の没落せより
鎌倉の兵火に荒れく昔の鎌倉ゆゑ陸奥ゆゑ富栄る諸侯の城下ヨリ
れば世渡る便著るゝ奥ゐる大崎殿の御内人ゆゑ僕が故主あり彼処へ
赴くべゝと真實ならぬ虚言めゝ奈四郎との説ゆ後ゝその十一月の廿九日
三四日の比ゆゑ八王寺の客店を朝未明ゆ立出くゆゑ路を急ぎ登
時媼内ゆ肚裡に思ふ彼身の悪支度覚れて落人とゝ主の後に跟て陸
奥三郎伶俐ゆ紛れ無き頼ゝ甲府ゆ在り時ゆ主後とられて
かゝるゝ面々の蜂を拂ふに優とゝ曩ゆ宿所の小簞笥ゆ金を送れ
とゝるを見ば盤纏ゆ不足なければ人家遠所ゆく結果く金を暮る
とも落人れば出もあらじとの分別を果さぬ腑を嗤ふも及んやけふとく翌立
過ぎとゝ思心を色ゆ出さぬ高さり氣ゆく慰めく同国ゆ四谷の原を
過る程ゆ下浦ゆ行けりこの地ゆ當時郊原ゆく西南ゆヨヌ麻ゆ河の里ゆ民
屋稀ゆゝ疎林枝をすゑ岐道ヨヌくゝ冬ゝ畔人を迷ゝむ既ゆく媼内を
惡心頻りに已に死るく赤ゝ究竟の処と思ひて四下を見るゆ来る人絶てゝゝ
腰ゆ帯る一刀を引抜き声を高げ背より来の懸ゝ奈四郎が隅を項骨
かけく丁と砕ゝ斫られて苦と叫びて倒れとく踏留て抜あせんと云ゝる処を畳
うけて載る刀ゆ大ゆ又頭を砕られる奈四郎怒れる声をたてく虎狼野心の奴
隷が敵對ひ主をうゝ海の野間ゆく世を武蔵野の逐水も終ゆ脱れぬ身のとゝ
天四訓呼びたゝせんと倭僧に成るゝ抜晃ゝも刀を頻りに振りく斫らんと進
むを物とも せず噫小さゝ兒天四訓呼ゝ人を殺せば又殺さるく報ひとゝ
ぞや年来の好み実ゆ木工作を殺ゝる業をこの世で果さるる笠盃の口を喰んとゝ
弥陀を念じて死天の旅十万億土へ獨ゆく覚期をせらと不敵の嘲哢又幾

刀欲砍伏々々十々滅を刺んとする折ふし西のくさまより旦方を望き来る人影ま
刃をそめく叙次ひとり〳〵と見えくり唾を奈四郎が懐る財布をもあく引出して
幼切なるをそうち戴た見えを取れば死とも生とも要はるー寛哩と御座立て血
刀を拭ひ歛る強悪非道何処へいるん稲叢の蔭を目柴に足の向く方を先
路のけ袋江五田のくを逃亡り然程ま犬塚信乃犬山道節へ濱路姫を
送らんとく權く蛮崎照文ま相俱ーて石禾の指月院を出より第三日の曛
昏ま武藏の四谷まで来まり信乃ハ宿りを討ん為ま濱路姫の轎子ま先ろ
三両三町人家るくを急ぐ程ま忘れば先路の枯芒花のほとりま砍仆される
旅客あり近はく信乃が足音の忽地ホ耳ま入りけん發起と立く刀をうち
振り素奴媼内逃さで〻と呼りるぐら轂まとせーを信乃ハ驟ぐく身を反ーて
利腕を梵と合ま留めく面をあーて仆とそ泡雪奈四郎　句　犬塚信乃孰〻

かち毛言語の声の中ま逃んと挿扎く奈四郎が刀を奪ふく礫と砍ま拳の
冴ホ雨妻時もあらぬ春を汚ま反泡雪が首ハ地上ま滾落く消る枯野の草の
葉を軀の鮮血ま浸ーり浩処ま道節照文ホハ轎子をのぞくとこの野遁ま
来まれば信乃ハ奈四郎が為体を如此々々と報知ーて這奴既ホ深痍を負ホ
な眼も其処ま闇をけん某をく媼内と呼りけく砍ん〻る刀を奪ふて頸轂
落ーぬ有りまこの奈四郎ハ倶ーる奴隷媼内ホ傷けられま疑ひるー仇るものく
ヨ久原とも従僕のるホ〻ーハ現積悪の報ひまそとのま道節領ーて彼媼内
奴ハ路用の金を奪んとくの所行ありけんを奈四郎ハ尚死ぬぬーて御遁ま首級
刎られハ天の分配寔ま妙〻奈四郎が終る所ハ斯あるべしとあら奴隷の為ハ郎
主人よりも悪人ありとふとも其を傷けく逃亡る媼内も亦安穏るんや久後想
像るべしのことにまを照文も進ま寄く這奈四郎ハ姫ーの養父木工作叟の仇

五の君
道節
信乃
五の君を送る道中ふ信乃もてすぎく仇を撃ち

主を賊して堀内更ふ亡命す
堀内
赤四郎

るゝ事ふかく甲府を逐電して刑罰を脱れを本意なく思食さるゝ圖らずも
あるよ怨を復せゝ犬塚生の功賞を蒙ぶ養父の白骨と讎敵の首級を
齎して安房へ還らせのひるゞ見ふ優さる家果さるゝいと歎くゆと稱へく躰と云
云と姫うへよ報まうせば濱路姫歎びく信乃が功をも感ずゆかくて蟹崎照文が
奈四郎が衣の袖を切取く首級を包む夥兵ふのくてその霄に二犬士共侶ふ四
谷の里よ宿りを投め次の日は巳の比及よ墨田河の上よ来ふけり登時信乃道
節が濱路姫と照文ふる別を告くまうしけり河を東へ渡ゝゆゞ下總よゆへを
道中ひとく異さるべゝ某ふとの処ゆく身の眼をあるべゝ莊助ふの餘の犬士ふも
志ひく全く聚くが食共侶よ安房ふ到りく見参ふ入るべれと宣ふ濱路姫も照
文ふも餘波を惜まを別をよ忍びぎ切て真間圖府の墓の邊までもを放さり
ゝ三犬士が後ひゞ立去らんとけれが照文が已をを汲を金一百両をさり出く二犬士

濱路姫の歸郷ひ父祖再会の尼作るどをくよくくく考ゝつけんが要るゝ今具は是看ん

贈ひくらふ安うこのあん金が犬士の為ふ某よりてゆひゝ五君の賜ゆを盤纏まゝ
かゝぎとも受納めそ後日の所要よ用ひゆと叮嚀よくば道節沈吟して犬塚が何と
ゆらんこのあん金が俺们ふのを賜ふれとも皆ゑゆよ盤纏よ物を剛ぎとそ推辭なる
を礼るべゝ自餘の犬士の宿まるゆが君の恩よ預らせん御遣のまゝろのうをを問
ひく信乃も沈吟ひくて趣をの理あり句然らばこの一包金を且く預りをんと
応て弁一額ぎうをく俱よ君恩を謝ゝをれば濱路姫が二犬士の績ぶ誉て送別の
まるゞくるを労ひゆはれが照文暇兵ふも二犬士まうち對ひく食再會をを契りける言
果く濱路姫主從が渡船まうちを来て前面嶋よ着ゆを二犬士がらるゝの岸よ
雲妻時立在く目送りけり尓后濱路姫が悲るく安房の濃田よ還りのひゝ比大父
義實朝臣と二親義成御夫婦と男女の胞兄弟達が甲斐ふ在りる年来の
ゝどもを生ゆのらゝ水ユ作が大塚信乃よ妻がせんと欲ゝゆと信乃が結髪の妻

濱路ゟ夕ぐれ寛魂のゆるゝ恥てらひ出るつひ美我實も美我成もつやく出ひけゆ
ゝ照文ゞゆもとのゆをのゝ知るゝ絶てゆくけゝ不題大田小文吾悼順ハ大坂毛野ゟ
あゝんとそ暴に鎌倉へ赴くゝゟ毛野ハ其処ゆも在らぎゝく絶て往方ゞ去るゝ一ゝけれゞ
伊豆の山家を索ゆんとそ下田船ゟ便りを討めのそく水行ゟ風暴れて破船ゞ伊豆の大
嶋ゟ繕ゟと両三月稍繕ゞ解ゝる日ゟ又悪風ゟ吹流されて這回ハ三宅嶋ゟ著ゟ
ゝゟ四地へ遠ゝれゞ帰らんとゝるゟゟそを沼ゞ罪ゟくて見る配所の月ゟ慰めゝゟ吾
影の外ゆゝ友もるゞ枕磯山ゟゝ一音ゟれども風の便も絶果て嶋ゟ在ると既ゟ
ゟく一稔ゟるゟ及び一比浪速へ帰る高瀬船の難風を避んとそ一日ゟの嶋ゟ
歌ゟゝゟゝを告相譚ゟそ船人ゟ伴れ出ゆゝ浪速津へ辛くて著に
けゝ身のゝとゝゝ疲れゝゞ有馬ゟ湯治。南都左衆ゟ保養そゝの年を空ゟ
甚春ゝ次の年の春ゟゝて北陸道ゟ遊ゞと又一稔石濱の尼難釋て鎌倉へ
赴くゝゟ四稔とゝゟ三月下浣濱路姫の安房へ越后州苅羽郡小千谷の郷ゟ旅
宿を世ゟゝゟハ鯛賀源八と呼れる侏儒るゞども角力の最るゝ今ゝける技を
已く名字を亀石屋次郎太と改めゝゟゝて客店をそ生活とゝゟゝる高
次郎太ゟ地方の壮佼頭領ゞ稱られて闘諍の和説るゞゟ立入ゞとらゝとゝるゝ
れゞ當時ゝの地方の習俗ゟく盗竊密夫の悪事ゟゝゟゝ人の害ゟなゟゝの
ゟゞ郷の壮佼ゟれを搦捕て活さゞ殺さゞ神慮任ゝゝ命ゝる私刑ゟ行ゟを
恒例とせゝゟの神慮任とゝゟゝゟ小千谷より十町ゟゝ藩山のくゝゟゟる庚申堂
ゟけゝ近曽大く頽破そゝの神像ゟ亡ゝれも堂ゟ荒る伏ゞゟ人の憩所ゟ
送ゝゝゝて件の罪人ゞゟの堂内ゟ牽そゆゝく。矯樓の梁ゟ吊ゝ置て夜毎ゟ
鞭懲ゝて三夜ゟ死ゞれゞその釋却て追放ち死ゞれゞその亡骸を千隈河へ流
ゝけゝゞそて悪根ゟゟ怕れて他郷へ走ゝゝゞ郷中久ゝく異ゝゝ間話休題

却説亀石屋次圓太小文吾が身長の人に倍して骨逞しく力士めいたるを恐れて
稱賛しつゝ角力の物がたりをする程に小文吾も素より好む技なれば恐れずして與に
乗じて論辨譲るとなくして次圓太駭き感服して歎待ますます弥増けり既に
走て小文吾に次の日あるべき別を告て立去りけるを次圓太頻りに推禁めて留めどもや
はの三月忌なれば當圓古志郡二十村ゆゑ毎年三四月の比或は丑の日或は寅の日の吉
辰を卜定て角突と倡る闘牛の神事あり今年は隔明日與行なと既に定るを
皆人もまた何地へゆくべきと且く逗留して便宜に從へんとなを小文吾
うち笑て我は珍しき某堂青葉里に在りし頃博識家に聞きしは闘牛は原
是西戎の戯にて唐山戰國の時胡國を闘牛よりして角觝の戯を倣ひその樂を
や力士二人牛頭を戴て両々相抵くを勝負を奏しその國胡に近きを
二世胡亥角觝を好めり漢の武帝の時に始めてその臣張騫西域に到りて
二世及漢武の角觝を好む史記則漢書

これよりして武帝又角觝の戯を倣ひて是今の角觝の權輿
なり蓋唐山戰國の時武を講ずるの礼を増しそのその戯樂を為しとぞかれば相
撲を嗜むべきを皆人の光景にいふべきと問へば次圓太
敬びて扇を笏に物々しくうち咳きて講ずるに抑越後州古志郡なる二十村は東山
邊の摠名にて實は二十六村あるべき属村を相加へて細かにこれを數れば五十八村
及ぶとぞ然れば這二十村なる荒屋逃入虚木の三村合保の鎮守の神を十二大權
現と齋稱して各々その村落に神社あるこの神の祭祀と倡へて年の三月四月の間
宿雪の消果る遲速によりて定日なく又定りなき地所もあれど大約寅の申の日に
當る吉日を卜定めて里人闘牛を與行せこれを地方の俚語に牛の角突と呼做して
この年のごとのあん時より當郡のことはいと昔より今に至てあり断絶あらざりけ
よくこの始をなすものはそこなれくもあれ家に養る牛あるを牛と闘せんとなすものは

本日の定らぎとる弥生より乳を飼料ゑ生草より籾をヨクくしと折々餅ゐを食しつ
既ゑ本日の定りて牛の澤とくせんとく蝋種或ハ油雑巾のく幾遍とく拭ふ
程ゑ毛色日比ゑ十倍しと就中黒牛ハ天鵞絨をゑ包ほ如く彼羽毛ゑ芥子せー
とゐ魚皆國の闘鶏ゑ想像られとゐと勇ーゑ北國の沿習ゑ戸々ゐる牛馬ハ
初冬の比よりーく明年の三四月まぐ皆是厩櫪ゑ雨ゑ露られと外ゑ出るのあるこ
るければ秣ゑ足りと乳ゑ養ふく肥太らびとゐゑ況闘牛ゑ出きんとゐ牛のぬーハ
物の費も敢厭ゐぎぞ妻子奴婢まぐも牛の為ゑ心を用ゐ鍾愛月比ゑ弥増
たり有此而本日ゐなり乳ゐ磨ゑ立ゐ牛共を各々牛荒屋より牽出ゑ畜
生ゐれどもその意を汲く欣然とーく前足を屢大地ゑ蹴立ゐる奮勇の乳色顕
ゑてゐ牛ハ南部の牧ヨクゐ早ゆゑ佐渡ゐ地牛ゆゐ毛色も一ゐら祢ゐ黄
牛蒼牛黒白桃花四足白虎文額白牡丹絞りゑ六出様ゑの雑毛もさゐ

ざゐゆく。枚挙ゐ遑ゆび又形體ゑも大小ゐり旁力勇猛ゑの差ゐれべ今
定ゐれハ以ゐこけれども這田の大牛ハ逃入村ゐ角連次牛田村ゐ子皿右衛門
虫亀村ゐ須本太郎木澤村ゐ幹之助蓬村ゐ艾三郎塩谷村ゐ
辛之助小栗山村の判官ハ元らび牛ハ最ゐ抜ゐ俗ゑ大関と稱へゐ只こと
のゑゐねどもいまぐ元ぎれば大畧ゑ又その村落ゐ出ゐる牛奴を力士と唱ゑ究
竟ゐる壮士者或ハ紺染或ハ花田の山夾衣ゑ紺の股引脚絆を穿ゐ奴又
附融とゐのゐを穿ゐるもヨクゐり又ゐ甲ゆゑ華ゐを畫ゐく或ゐ拷の縫纈
纈ゐ或ハ蒼く或ハ白紋縁をさゐぐとゐるゐく肚甲ゑハ郡内縞絹繻
半ハ故ゐ美を畫ゐて帶蹈皮副帶ゐ拭まぐゐく風流残上日とせー草
鞋ハ白紙を締ゑ拈ゑ紺の麻索をゐく匂とせーのれゑの日を晴と装做せゐ
七八十名もゐゐべ。ぞ中ゑ木澤村ゐ雪車九郎。荒屋村ゐ漏右衛門逃

入村ゑ跳四郎小栗山村の毬占衛門これら宗徒の大力士ども会よく牛を犢ふ〻〻又牛裁判と称めゐて東西の力士共倘争ひを起せと兵あの兵必ゐを和賓ゑく異ふ治むるを宗とも牛央主の名を被けて某村の甲右衛門村の乙八郎ど呼ぶを地方の習俗兵彼のゐ〻の名馬のごく別に名つくる扶隔明日奥約むるゑ闘牛の地所を討ふ塩谷木澤西村の境節ゑく逃入荒屋虚木の三ヶ村の合保より其地を借く當場とせるこの地八三方小山ゐ〻その四ふ坦然ゑる佃圃を借くは絶とも古の遠近ゑる連山八抹茉刈てふ藩山ゑれども草葉ゑまこ萠出る処々ふ斑消ゑ遠山の雪ふ霞天引く春色今ちふ珍しく枯結縷草の上ふ筵布渡ゑ出茶屋あり酒舗あり蕎麥團子煮深物餅駝果子と鬻ぐゑれ只この一日の為ふゑくひくとゑを知らぬ鄰郷鄰郡のべたら遠近堺の老弱男女も鈍んとくゑ見おろさんとく岡ふ依〻く徘徊を柳幾億萬人ゑる宛宛塘渡ゑ蟹ふ似ゑ彼牛裁判補助人ゑるこの中ふ雑〻く異ゑるとゑいれを鎮む力士八処々ふ隊をゑく又看官の中ふ人ら吉八その平坦ふく数十間ゑる四下を彼此と徜徉を久く雪ふ閉籠られる暇の牛八野邊珍しげふ高く敷ゑれく敵ゑるその大ゑるのハ高サ四尺二三寸四五寸ゑも及ぶゑ鉢滕と名つけゑる角の餝八緋の縮緬或八紅ゑる圓続の紐をゑ両角ふ緘みゑるその事の為体ふ目を驚さゑるゑ〻そゑ牛八期を俟白ふ折々高く吼る声物然とゑく犇々ゑ介の葛盧ふわゑぶれバ何とゑらんとを知らねど研ゑ御音ゑ霞を辟く彼淮南が井を舐く雲ゑ入りけん勢ひゑ月ふ喘ゑ呉牛央似るべくもあらぬゑる海内ゑ雙の壮觀ゑ扶角力の光景と衰牛の勝負八本日を俟く約ゑんゑ〻ゑ

訥辯を畫くべしとあれば九牛が一毛のミ鳴呼ぞまく
そのと息吻もまぼ物くれば小文五吾坐ホ奥ホ入りてそなりろそのえ一素より
急ぐ旅なるれば心を隨ふ逗留せんと応ずるの日を俟程ふ間絶ホ一日を置くを
闘牛の日ホるるの時ホ文明十四年。壬寅の夏四月初旬天よく晴て長閑なる
小文吾ハ未明ふ起くるの案内を催促も登時あり次國太ハ小文五吾ごる編
室ホ来そのかちけの牛の角突を供ふ僕案内ホ立べしと豫ていはひゆしよ昨宵
吾郷なる壮佼ホが川口人と闘諍をなのごてのとむづくくなるくうと今朝報ら
もく必ず今ゆらホ默止くるかれば僕ハ件の若共を推鎮めく和睦さをんと必ずら
あれホよりる今日のもん供ふ立くあり僕が相撲の弟子ふ鮫守磯九郎と呼ま
めあり寓居人で必ず認りそとをるを渠を案内ふまかるもべるれがれをもせ
必ず一緒僕がるをとも渠も亦土地の人ふ粗知られるれるれば假度を取ら

るべしとの義を允さをあくりしとのふを小文五吾うち笑ひをを送憾なるを勿
論和殿ハ角突を幾遍もをんをひけん所要果ふ遲くとも来のへしと応をも
次國太ハ欲びく然らば早飯をまるらせん僕ハ彼議ふ就く今ふる彼処へ
赴くを許さををと遽しび外面望く歩ホるかくく早飯も果らば鮫守磯
九郎ハ准備の編提と一卷の莨筵を肩ホうち被く刀を要ホ一つ誘とを
編室ホ来ふければ小文五吾ハ叮嚀ふけの案内を労ふく中刀を腰ふ一つ大刀を
引提く立出れば磯九郎ハ先ホ立く塩谷木澤の両村なる境を投そいを
け既ホく小文五吾磯九郎を郷道すホく千隈河を舟渡ふも千隈或ハ千曲
伝る一名を信濃河とふ魚野川落合く北國中の大河をこの河を渡ふ果く
又ふくを數町ホく相川とふ山村を過るまくらいをぐく山路ホく或ハ陟り或ハ又
降るを數ふ是より角突の地所まで凡二里あまりありとふハ休ふ暇あるを

るーこゝかくーく彼四ツ曠坦る闘牛の地所ゝ至れば各も聚合ひー老弱男女
その日を晴と狂衣做ーるその衣の色々るる花の如く丹楓ゝ似て妖艶とく美ー
なる北國の風土ゆく桃櫻の花さゝゝ又只一時ゝ綻びて彼此ゝと匂ふ景色を
含む楊柳の糸ゝ遊糸ゝある春景色四月上旬ゝ北国ゝ春景鹿児斑ゝ消残ゝ白
雪も亦愛くーこの日ハ雨後の晴天ゝ一朶の雲るく猛風吹ゝ連山の波濤ゝ
似る青葱とて碧色あり白色もありく尖ゝ晴霽既ゝ雪霽を籠め硐道
稍春深ーー人聚ゝて岡いゝく高く鳥啼く谷の深色を知る寛歩ーて到る処
奥あゝぞとゝふるるーゆくて磯九郎ハ正面る岡の邊ゝ華ゝ延ゝて布儲て小文五ゝを
上座ゝ請登ーその身ハ傷ゝ扈後ーゝ向ゝて共ゝ正首ゝ慰めり
然程ゝ闘牛の時刻もまりければ村人各ゝ彼此軟ゝ置ゝる牛共を漸ゝ牽
ゆくて迭ゝ勝負を決せーむその支の為体今の相撲の土俵入攬組とゝふ

異るゝぞ且ゝ牛と牛とを聞まるゝ東ゝ某村のム右衛門西ハ甲村のム兵衛
と呼ゝ名告ゝ看官ゝ是を知む初ゝ形體巨大ゝぞ膂力飽まで猛ゝ
牛ゝ是を聞ーー中ハ大ゝぞ又小ゝゝ強ゝぞ弱ゝ前頭ゝる牛を聞ー後ハ
大関小結と唱ゝて大牛の強勢ゝを聞まるゝ亦是今の相撲の如ー既ゝ
一番二番と勝負ゝ争ふゝを欠ゝ且東西ゝ牛主各一頭ゝ牽ゝ牛ゝ
牛と牛と相距ゝ遠ゝ其間若干丈力士ゝ牛麻糸ゝ解放ゝ雙方齊一
奔蒐ゝ角ゝ突合ゝるゝ或ハ迭ゝ挑視て左右ゝ蒐ゝ相遠ゝ
數回ゝ繰返ゝ相近ゝ突然ゝ頓ゝ合ー角ゝ縻ゝ推ゝ亦牛
縻ゝ解ゝ放ー一隻の角ゝ田ゝ鋤ゝ圃ゝ打ゝ大地ゝ數間擊ゝ進
ゝ角ゝ聞ゝ牛もあり又敵ゝ進ゝ迫ゝ俄然ゝ逃ゝ大ゝ牛
縻ゝ解ゝ放相進ゝ角ゝ聞ゝ牛ゝ迭ゝ膂力ゝ捷れー牛ハ推

戻し衝返されて漸ふ眼中合血く朱を注ぐるめく如く全體より汗を流し四箇の角を閉まる音量々として遠く聞えう掎角の勢ひ怕るべし又ふ殷なる強牛どもい組でい離れ突くその勢ひ迅速ゆくゆく舛く突外さず忽地眉間を劈かれんとする目危く忽ちよく煩悩して行ふとする就中大牛の脅力大象ふ敵まるものい角をもて投仆し更ふ又角をもて突殺さべくえんとする力士ふ群蒐推隔く提誇ひとする牛を駐む事及ぎして拄げれば肩牛い膳を突れく矢庭ふ斃れざるとする一角の鋭きと鉾のごくその勢ひ笠則ふ似たり。かる故ふ東西の力士七八十名共絶の四方を輪立して閉まる牛の五間十間衝然とく推仆ふい力士も共ふ山辟れ動散く縱横ふ奔走されば勝色なき牛々この力士們い僉欽ぎ愕ぎて鳴らし推ゆく牛ふ從く只洪波の打どく寄るとふ數ふ群集の老弱瞬ぎ見て彼や肩るん既ふ弱りぬる。

と相憐まるふ汗を握るふ各見い肩あれば牛角の勝肩ふ争論あれば彼牛裁判ふ男東西の力士ふ渉ひとく商量して牛主と見い肩のみを和寛るどもふ強弱その差ありとのくも既ふ肩色よる牛い忽地角を退外して奮直ふ逃走ぎ鬱の力士ふ動揺々々と追蒐く捕捕るを拐ぎ追ふ工の遲々ふとい其の逃牛遠く走りて郊原田圃の差別なく山林嶮岨の嫌忌なく樹を倒し石を輾ぎ勢ひ名狀ぎべき況勝牛のそれを逐る勇力猛奮震十倍して當るべきもの抜ふ熟る力士ふ牛の左右ふ拘らぎ横ざるふ働と雄のせく角を両ふ抜ふ熟る力士ふ牛の前足をうぐ足のく絡まく背ふ尻を撼るもの或い牛の後足ふ携著れ或いその尾ふ推乃ぎ曳ぎ吊れるべき駐るもの或ものも優る大牛の昇ぎくせん術るれと雖その牛の四辛丸ぎ両ふ掴く引駐れ安く殺くま怯む処を毛をもく糾る牛麻ぎ雖の羽を

のく鼻ホ融せば鎮らぎとゆふとろー有此而絆素を轂添く人野ーと牽
のて返ぎる牛ハ意氣揚々と勝誇さる驕慢の氣色この時ホ顯れく吼る
声年々ころ力士ホ氣をうち護りて齊一凱詞を揚る声山谷ホ相答へて
勇ましとゆふも疎へ或ハ又牛角の勝負を果さぎーく一方の牛ゆう弱くを
其方の力士阿ー引分と欲ぎるを敵ぬの力士ホ聽ぎーとゆまぐーレ(と)呼ゆ
ぎく絶の四方を造ると相撲の行司ゆ彷彿うかくとる勝負ゆ牛ハ雙
方の力士ホ和譚ーて大勢入く推隔辛くぎく引分ゆホその牛共ゆ飽
くぐ迭ゆ突んと走ゆ蒐るを力士ホ段を旋ーて敢又鬪ハせぎ竟ホ牛
縻を引融ーて牽く舊処ホ到るゆその両牛欣々然と自負ぎるゆゆ似ゆ
氣色ゆ迭ホ負ゆ故をゆく意をのこの男を示ぎるべーゆれば這數十番ゆ
勝負の間ゆ觀者 究醉るゆ如く惘然ーて食を忘れ愕然ーて膽を落ー

日の傾くを覺ぎーく奇へ妙へと稱ゆる声ハ彼颱ホ鳴ゆ海の如く又遠山の雷を
皆くホ似ゆ。實ホ是北國中の逸比名物宇内の一大奇觀(この牛の角突の事、次圖太ゆ物ゆ段
ゆの末由、この篇の左ゆ詳ゆ。)ゆゆー程ホ大田小文五ハあの幾番ゆ鬪牛を觀く且
驚ゆ且感ゆ現ゆ智の畜生ゆ敵ホあゆ段ゆ史記ホ所云角觝ゆ
義をゆ會得せゆ奇妙ホ在と嘆賞ゆれハ磯九郎微笑く某ゆ公角
突を今茲ゆ二度び鈍つれども負ホあゆ角突ゆ前
月ゆ朝夕神厨ホ燈燭を献ゆ祈ぎ必ハの隨ホ勝得く帰れば
濁酒を釀ー餅を搗く賀席を開ゆその村中の老弱を送ゆく招ゆく管待を
とゆ去の角突ゆ負ゆる牛ハ敵ゆの牛を後々まで認忘れぎ大約この二十村ゆ
深雪鄰郡ゆ弥増せホ山里ゆれば樵路熊徑ゆと陝ゆ処ヨゆりこれホゆる米
粟を負ひ柴薪を負ゆる牛と牛の行遭ゆる途を讓ゆる由ゆ是もこの角突ゆ

清泉堂蔵

後肩なる牛のせなかをつき、敵手の勝牛にあなどられハ頭を縮め立駐りてこれを避ざ
とのみしてあるし又雙方甲て乙なかりし牛ハあなどりくとも途を譲らざりゆゑハ總て牛
奴の身を労せずしてよくせつく自然の勢ひにまかせ是と話るに小文吾ハよく感じて
送る番ひを見る程に唯この大牛一番のそれけふの結角とぞなる一方ハ逃入村の
角連次四尺六寸ありといふ黒牛の骨逞しく脂満て磨立たる毛の澤ハ現天
鵞絨に異ならず。その角の長く鋭き彼石劍を欺くべし又一方ハ虫亀村の
須本太牛高サハ敵手の牛に優て四尺七八寸ありといふ連銭葦毛と見えし
めでたるその雑毛まさに鱗に似たりその角ハ烏犀を欺き形ハ封牛に敵すべく
眼ハ紫銅の鈴かと怪しき蹄ハ冶ざる鐵に似て實に象駝も伏ぬべき勢ひ
あり人々これを観て明月を洗し目を驚さざるはなかりし登時磯九郎ハ又小文
吾に耳語てかの須本太牛ハ龍種なり初かの牛主の家に逞し牝牛

ありけり一稔夏の比その家の牛奴が亡れる薪を肩せんとて牽て深山に赴
きて牛を水澤のほとりなる樹下に繋ぎ置てその身ハ彼此と分け入りて終日柴を
刈る程に澤の中より雲起りて晦暝として黒白をわかず牛奴ハ惶惑ひて
あちこちとびくに走りて樹蔭に走り離れて雨を避んとする程に且くして雲
霽れ澤邊にありて牛を見るに聊異なることもなし但龍涎の如きもの流
れて牛のほとりにありそれ龍の精なるべし是よりしてその牝牛孕む事あり月満て
産る犢ハ今開合せる彼牛也現形體の大きなる面魂の猛きハ誇らへ見
る雑毛の鱗に似たるハ是龍種なれバ也當國の守長尾殿継のよしを聞て
食て件の牛を徴れしかども牛主惜みて進らせず今茲ハ五六歳になるべか
らんけふの壮観ハ只是その意を認て見せざるとぞ小文吾微笑てかの牛の
異様なれバや龍種といふ説ハとに信られぬことながら現怪有の奇物也又敵手の

黒牛も尋常の物にあらざるやうに覚えて推向ふ
勝負は片みを突立て勝負甚麽となる程は力士ホハ件の両牛を東西より
牽寄せて闘ぜんとせるに大力士ホ推材平くやうや等の人々須本太ハ
龍種ハ又角連次も二十村の牛を暴牛と聞て失ありと云ふ後悔
其処は立て已ねくと制するを力士ハ聞ず東西の牛主れを肯ぜいるを
趣由なるよ為ば俺们の牛ハけの角力の結局なるよ今聞せたまく已
と云ハ始めて終て番組全くなるモノハ神慮もまは測くなり人ハ為
のなるを鎮守の神の祭礼なるを今ち阿むと云ハ孰れも眉色を
変ず諸懸りは各く引分ん為るのあるを敢やく聞せると敦圏ホ裁判人
ホ立入りくめくまくふ為れば聞ーく後ホ引分ものとなる大力士ハ争ひ
らびとく聞せるとのまるまく力士ホハ両牛の牛縻を雌雄方ふ解放

群集の衆人これを飲んとく前るハ進むを覚えむ後るハ皆立て前る
人の高を罵る声囂々と打撃せり然る程は須本太角連次の大牛ハ
迭は敵ふと佶とえく歩を進を近つ寄る。恐時呼吸を揃るが如く又その
透を寛ふが如く頭を低く脊をたてく睨あ上ず十向ちり各々その圖やうろ
けん忽地角を突合ーく推ハ推れつ挑をあ汗ハ流れて四足は沸ひ蹄を踏
駐めく大地は滅ーー合血る眼ハ燃る狂と怪を鍛做を頭骨ハ折るく狂と呼ふ
ぬるふ組合ーとハ揮放釋を又組合ーて勝へる雌雄方の角の音ハ高く然と
ちく拍子を違つ三反ぬるハ推れて又推返を勢ひは力士ホも ホ奔走ーく
或ハ為を抗ふを撥げ各々牛ホ勢ひを次ぎけて勝負となる程ふ角連次を
稍疲ちく既ホ危くえーぶ大力士ホ声を被けて疾引分よと叫ぶなん。
東西の力士数十名簇々と走りかるを推隔引分れば角連次ハその隙は路を

いそ九郎
牛力士
牛力士
うー力士
小文吾

牛力士
うー力士
牛力士
自若くして
小文吾暴
牛を駐む

討て逃脱るを須本太い尾脱さでと莫奮直ゐ追蒐るを力士ゐ透さを携乃
著く捕捕んとければ須本太弥怒狂ゑ角ゐ突被け空ぎゐ投飛一反
倒を勢ひ當をめられば投ゐ熟る力士ゐも駭騒ゑ辟易して東へ崩れ西へ
靡く周章大るこるばりけり然程ゐ須本太い角連次を索難と昼夜に
虐るるれい四方ゐ狂巡るる人も物も當るゐ任して角ゐ撃ち投屠る
猛威ゐ怕る群集の老弱東西ゐ奔走南北ゐ逃迷へ出茶屋酒店
果子菓麦の牀几葭笠廉を踏淆さを只ゐ膽を錬を可えれば小文五吾と
磯九郎い逃る衆人ゐ隔られて迭ゐ索る遑もゐ然けれども小文五吾ゐ些も
騒ぐ氣色ゐく岡の下る小松の邊ゐ磯九郎を俟程ゐ突然と走る須
本太い小文五吾を截んとまるを閃と反て角を梶と捕留ゐ畢竟小文五吾
暴牛を推駐めく後の話説ゐ第八輯ゐ解分ると聴給へ。

曲亭主人曰這個の鬪牛の光景い越後魚沼郡塩澤の里長鈴木牧之が庚辰の
春二月廿五日彼地ゐ到て目擊する圖説ゐ由ゐ抑鬪牛の一奇事い越後雪譜
中ゐ載べられれども毎歳筆研繁多ゐ創ゐ追ゐ目老歩旅紀を
敷ゐの故ゐ彼州ゐ遊げれば事足ぐ歳月を歴ゐの故ゐ牧之の企
望を空くせでせく言のゐ及ばるる。寫真の圖を巻の五の簡端ゐ見えたを
又曰予が著しる冊子物語の三十年ゐ及ばるれいその剞板若干散失て全う
げるの故をのく久く刷出ざるゐ。ゐる剞板をゐるぐ求めく足らげるを補剞ニに
校訂を乞ぎく恣ゐ画を易文を衍脱して再刷るのゐと伝ぬ所云括頭巾
縮緬紙衣化競丑三の他るれゐ。べゐ予ゲ名號ゐとゐも補剞を
予ゲ校訂を経ぎて他人のるを成るのるり看官の為ゐ。

里見八犬傳第七輯巻之七 終

○著作堂手稿里見八犬傳第七輯画者筆工目次

出像 巻ノ一二三四 并巻ノ五闘牛圖 溪齋英泉

出像 巻ノ五六七 并ニ筒端有像一頁 柳川重宣

浄書 巻ノ一二四五六 巻ノ三 巻ノ七 筑波仙橋 谷金川

○著作堂新舊国字綉像小説涌泉堂藏版畧目

里見八犬傳（さとみはけんでん） 初輯ヨリ第六輯迄三十一巻既行

同（ちくく） 第七輯（だいしちしう） 本編七冊 あの度出板

勸善常世物語（くわんぜんつねよのものがたり） 全五冊別人補刻の本なる依之舊本と同一ならざる所あり

家傳神女湯（かでんしんにゅとう） 婦人ちのみち 渋病の妙薬 一包代百銅 近年はやく薬種なる虫らのとくもとめて薬種をえらびもとめ刻ものをせられなり

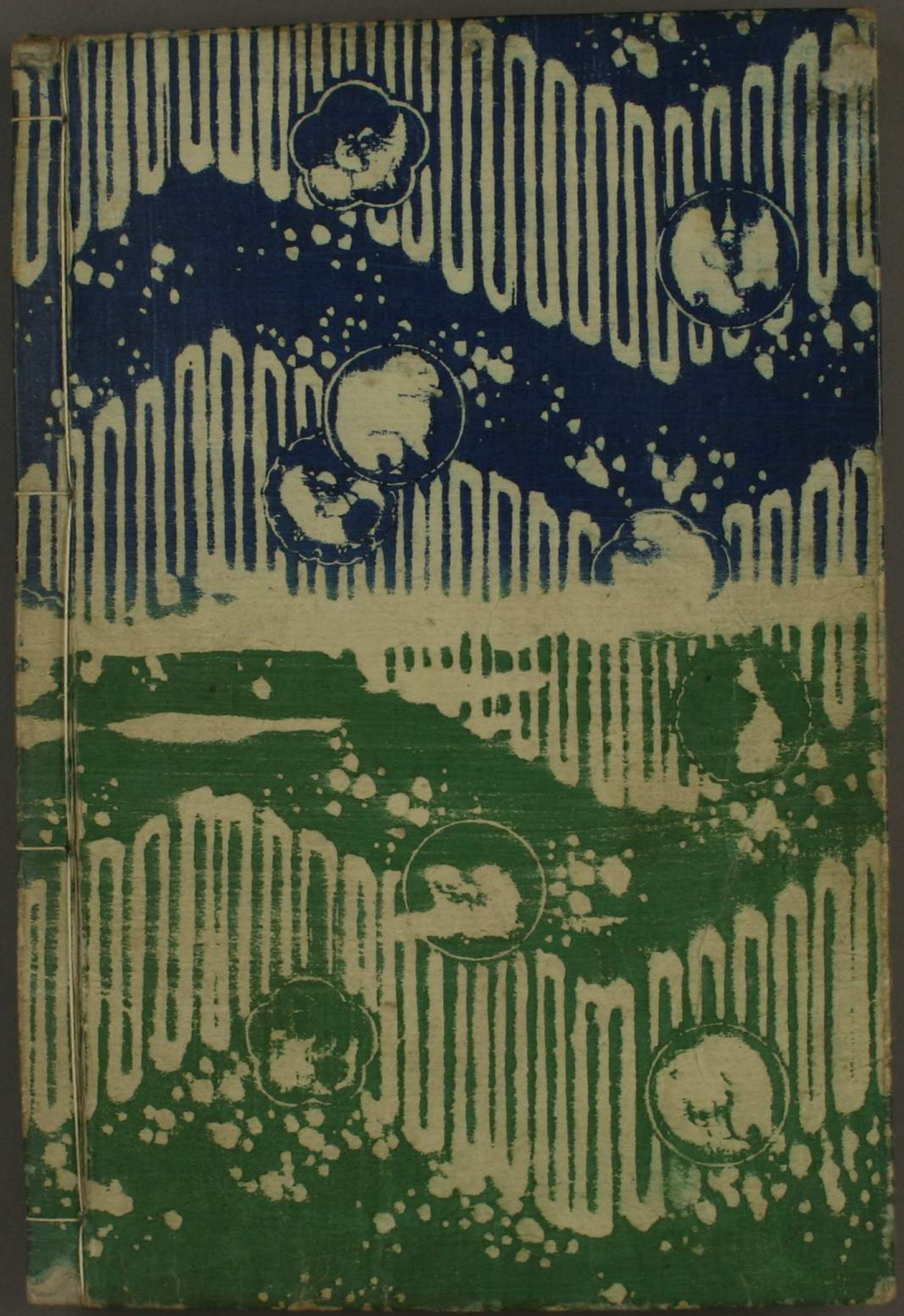
精製奇應丸（せいせいきおうがん） 大包代弐朱 中包代一匁五分 小包代五分 薬種をえらび製方をつくしよく分量家伝の加げんをもつくしたるよりたのもの百倍あるの神のごとし

熊膽黒丸子（くまのいきもくろまるし） 一包代五分 婦人のいきもの妙薬 一包代三十文銅

製薬 神明神下同朋町東横町 本家瀧澤氏 弘所 元飯田橋南側四方みな商 名代 大坂屋半蔵 取次弘所横山町三丁目賣薬店

大阪 河内屋喜兵衛 同 伊丹屋善兵衛 同 敦賀屋九兵衛 同 秋田屋太右エ門 同 河内屋茂兵衛 同 河内屋和助 同 秋田屋市兵衛 西京 出雲寺文次郎 同 村上勘兵衛 同 勝村治右衛門 同 杉本甚助

東京 須原屋茂兵衛 同 山城屋佐兵衛 同 小林新兵衛 同 丸屋善七 同 和泉屋市兵衛 同 須原屋伊八 同 出雲寺萬治郎 同 桝屋喜兵衛 同 辺江屋半七 同 長門屋龜七 同 三家村佐平

名山閣 東京芝大神宮前書舗

和泉屋吉兵衛發售